

不思議なことがこの世界には溢れている。

そのことを、もう一つのセカイがあることで知った。

これは、そんな二人が経験する、新たな不思議の物語。

語。

「杏ちゃんと東雲くん、ビックリするかな？」

「これからの努力次第だな。一緒に頑張ろう」

「うん！」

小豆沢こはねと青柳冬弥。二人はお互いの相棒達に内緒で歌を練習し、披露した過去がある。その時の相棒達の驚きに満ちた顔とキラキラした瞳、称賛の言葉が忘れられず、再びそれを計画したのだ。

二人きりの練習を終え、帰路に着こうと歩きだす。

「青柳くん。よかったら、セカイに寄っていかない？」

お茶してから帰ろう？」

上目遣いでこはねに問われて、特に急いでいないからと、冬弥も了承した。路地裏でセカイへと続く音楽を再生する。目の前に広がるのは、見慣れた景色のは

ずだった。

「……え？」

「どこだ、ここは……？」

——花畑。一面に広がっていて、花卉が空から降ってくる。街とは縁遠い、自然豊かな場所。驚愕したけれど、落ち着いて見回せば、とんでもなく美しい景色だった。

「綺麗……」

呟いて、こはねは胸の前で両手を合わせ花卉を掬う。ピンク色で、柔らかい。桜よりは薔薇に近い印象を持つこの花の名前は、なんて言うのだろうか？

こはねの声に反応して、景色に見惚れていた冬弥が振り向く。亜麻色の髪に、オレンジの花弁がついていた。

「小豆沢」

長い指でそっと触れると細くて、簡単に梳ける。

「ありがとう……」

摘ままれた花卉を視界に捉えて、説明なくとも冬弥が何をしてくれたか悟った。頭を撫でられたと思って、急に近付いた距離に動揺して。恥ずかしい。

「……驚いたな。こんな場所に繋がるなんて」

顔、赤い。そう思ったものの、口にしなかったのは、彼女が困る姿を見なくなかったからかもしれない。

「私も、こんなこと初めて……青柳さんと一緒の時で良かった。一人だったら、この景色を楽しむ余裕なんてなかったかも」

「どうやって戻ればいいのかはわからないが、一人よりは希望が持てるな。それに……」

こんな素晴らしい景色を独り占めなんて、贅沢すぎる。

二人して微笑むと、立ちっぱなしもなんだからと座ることにした。フワフワの花に埋もれて、ちょっぴりくすぐったい。

「良い香りだね」

「ああ。小豆沢は、この花が何か知っているか？」

「ううん」

「そうか……俺は、父さんへ贈られた祝花で見たことがあるんだが。名前は知らないな」

今度、図書室で植物図鑑を借りて調べてみる。その言葉を聞いて、彼は現状に不安がないのだとわかった。こはねは、このまま二人きりでも幸せなような気がする。一瞬、そう思ったけれど。最愛の相棒や家族、大切な仲間や友達に会えなくなるのはやっぱり寂しい。夢だって、叶えていないのに。

「……大丈夫だ」

俺がいるだろう？ そう問い掛けるような、優しい瞳。

「……うん！」

気持ちが始めていく。きっと、大丈夫。ポジティブにいこうと、微笑みを浮かべた。

——現実派離れしたセカイは、時を置き去りにする。

どこまでも広がっている花畑を駆け回るのは無謀に
思えて、せっかくだから堪能しつつ、頭で考えること
を選んだ。

「このお花、杏ちゃんにも見せてあげたいな……そう
だ」

トレードマークである帽子を脱ぎ、花を詰める。

「持って帰れるかはわからないけど」

眉を下げて笑うこはねを見て、冬弥は閃いたといっ
た顔をした。スマホをポケットから取り出して、
シャッターをきる。美しい花畑が、手のひらサイズの
画面いっぱい広がっていた。

「その手があったね！」

「カメラ好きの小豆沢が気付かないなんて。余程、白
石に直接この花を見せたかったんだな」

「えへへ」

気持ちはわかる。そう思いつつ、シャッターを再び
きった。不意打ちに目を丸くしている今の表情とは違

い、抱える花と同じく頬をピンクに染めて微笑む数秒
前のこはねが、冬弥のスマホに納まる。

「可愛い」

ボソツ、と呟かれた一言を拾ってしまった耳が赤く
染まった。なんと言えばいいかわからなくて、パクパ
クと口を開けては閉じるの繰り返し。

すると、冬弥のスマホがチカチカと輝きだした。も
しかしたら、元の世界、もしくは、セカイに戻るか
もしれない。

美しい花畑を目に焼きつけると、お互い頷いた。

「いくぞ」

帽子いっぱいの花は消えてしまうのかな？ 目に焼
きつけた美しい景色は覚えていられる？ ただの、白
昼夢？ 何度か感じたトキメキは本物？

「うん」

スマホの画面に親指が触れるのを見て、眩しさから
目を閉じた。もう一度目を開けたら、そこに広がるの

はどんな景色だろう？ 全部、わからない……けれど。

——青柳くんと、一緒なら。

——小豆沢と、一緒なら。

大丈夫。それだけは、信じられる。